

QOLの視点からみた新入生の入学動機と意識変化の検討

福本安甫、小川敬之、田中睦英、押川武志

A study of motivation and field knowledge of entering freshman students from a QOL perspective

Yasuho Fukumoto, Noriyuki Ogawa, Mutsuhide Tanaka, Takeshi Oshikawa

Abstract

In this paper we compare the motivations, views on life and pre-course knowledge of occupational therapy among entering students from the years 1999 and 2008. In 1999 a total of 49 students were enrolled and in 2008 a total of 42 students were enrolled. Informed awareness of the subject area increased significantly between 1999 and 2008 ($p < 0.01$), which followed a similar trend of the nation. Students who entered in 2008 had increased information about occupational therapy from their high school teachers. We also found the later period student sought advice from enrolled students and that location was a greater factor in their enrollment decision. For students entering in 2008 there was a shift in their focal concerns. We used the Basic Quality of Life Scale (BAQL) to quantify differences between the groups and found differences in levels of desire, confidence, lifestyle and social networks between the groups.

Key words : Occupational therapy, entrance motive, knowledge of specialty, Quality of Life

キーワード : 作業療法, 入学動機, 専門性認識, QOL

2009.1.14受理

はじめに

「十年一昔」という言葉がある。これは、世の中の変化が激しくて、わずか10年でも過去のことになってしまうことを意味する¹⁾が、大学生の場合はどうであろうか？大学生の流行に関する意識調査では、流行に対する知識と態度が情報の関心の高さに関係するといわれ、そうした流行は社会的背景などが影響するといわれる²⁾。大学生の意識を「特定対象に対する知識と態度」と考えるならば、本学科のように専門性の高い学部・学科へ入学する学生は、その専門に対する知識と態度をもって受験あるいは入学をしてくると考えられる。その一方で、大学教員に対する調査では大学生の基礎学力不足と学習意欲の欠如が指摘されており³⁾、理工系や保健系など専門性の高い学部ほどそう感じる教員が多いようである。

このように、大学生の意識が社会的状況に影響して変化するとともに、それが学習意欲の低下とどのように結びつくかの検討は、教員にとって大きな関心事といえる。そこで、大学生の意識変化を「入学時における入学動機」と「生活観」においてとらえ、学生意識と生活観の変化における相互関係を探ってみたいと考える。

対象と方法

調査対象は平成11年と平成20年度に作業療法学科に入学した学生91名であり、平成11年度入学生（1期生）49名（男：12名、女：37名）と平成20年入学生（10期生）42名（男20名、女22名）である。

調査は、入学動機に関するアンケートと主観的生活観としてBAQL (Basic Quality of Life Scale)⁴⁾を入学

年度の6~7月に実施した。

倫理的視点から、いずれの調査も調査開始前にその趣旨を説明し、協力が得られた場合に限り任意に回答および提出を求めた。このため、調査により回答者数が異なるという現象が生じたことから、本報告における対象数は検討事項ごとに提示することとした。

なお、BAQL以外は記述式のアンケート方式としたため、得られた回答について数量的処理は行わず、単純集計のみにて検討を加えた。また、数量的処理が可能なものについては平均値±標準偏差を用いて表示し、SPSS V.15にて統計処理を行った（有意水準は5%未満）。

結果と考察

1. 入学者の構成の変化と特徴

入学者構成で最も特徴的だったのは男女比の違いである。1期生では男性が24.5%だったのに対し、10期生では47.6%と大幅に増加している。もともと作業療法士は女性が多い職種であり、1期生が入学した1999年は同国家資格をもつ職能団体会員数9,511名のうち男性が占める割合は27.9%であった。これが10期生の時（2008年）には32,296名中30.9%が男性となっており、男性の比率が増加していることがわかる（社団法人日本作業療法士協会調べ）。まさに十年一昔といえるほどの変わりようといえるが、社会的には男女雇用機会均等法の完全施行の影響とも考えられ、女性の職域拡大に伴う男性の職域変動によるものといえる。当然のことながら、学生自身の意識も関与していると考えられ、このことも含めて検討したい。

2. 入学動機の変化

入学動機に関するアンケートの回答は1期生45名（男12名、女33名、平均年齢19.3±2.8、入学者比率91.8%）、10期生41名（男19名、女22名、平均年齢18.5±0.6、入学者比率97.6%）であった。以後、これを対象数として内容に対する検討を加える。

1) 職種の認知状況

本論文の冒頭に記述したとおり、興味と関心の度合いはそれに対する知識と態度を作ることに影響する。そこで、これから目指す職種についての認知状況を調査したので、その結果を表1に示す。1期生の場合は大学浪人を除いて、25歳以上の社会人経験者が5名含まれており、このうち4名は病院や施設での勤務経験をもつ。10期生にはそうした経験者はいない。

作業療法という言葉を知った時期などをみると、10期生ほど教師から聞く割合が高くなっており、高校教師

の認知度が高くなっていることを示していると考えられる。さらに、10期生では近隣や親戚からの情報が増加している様子もうかがわれ、作業療法に対する社会的認知度の向上を示唆すると考える。リハビリテーションの一般化とともに、認知度の向上は進展するものと推察される。ただ、与えられる情報がどの程度なのか、作業療法に対するイメージ形成に影響することを考慮すると、情報の質（内容）が問題となる。

この職種を知るに至った明確なきっかけはなく、「偶然」と答えたものが多い（1期生26.7%、10期生46.3%）。また、家族がリハビリテーションを受けている所を見たのがきっかけとなったものが、1期生で6.7%だったのに対し、10期生では12.2%と向上しており、前述の社会的認知度の向上と相俟ってより身近になったことを示している。

これまでに現場をみた経験があるものが半数以上あることと、何らかの方法で職種に関する知識を得ようとしていることから、受験者自身が意思決定の際にある程度の情報収集をしている様子が見て取れる。さらに、表には示さなかったが、職種に対する知識を得る情報源として特徴的だったのが、インターネットの活用である。1期生では1件（2.2%）だったものが10期生では7件（17.0%）となり、社会的変化が及ぼす影響を示唆するといえ、今後この傾向は増加するものと考えられる。

これらのことから、受験生が各種の機会を活用して、進路に関する情報を得ようとする努力がうかがわれ、受験動機の形成手段に時代の変化はみられるものの、動機形成の姿勢は変わっていないと考えられる。

表1 職種について

質問内容	回答選択肢	1期生(n=45)		10期生(n=41)	
		人	%	人	%
職種を知っていた		44	97.8	41	100
いつ知ったか	高校生	30	66.7	28	68.3
	中学生	9	20.0	12	29.3
	小学生	1	2.2		
	社会人	4	8.9		
	未記入	1	2.2	1	2.4
誰に聞いたか (複数回答)	両親	15	33.3	11	26.8
	教師	6	13.3	12	29.3
	友人	8	17.8	4	9.8
	書物	7	15.6		
	親戚			5	12.2
	近隣			3	7.3
	その他	6	13.3	5	12.2
不明	4	8.9	2	4.9	

2) 作業療法学科選択の理由

学科の選択が自分の意思かどうかをたずねたところ、自分の意思ではないと回答したものは1期生・10期生共に1名であった。1期生は親の意思、10期生ではなりたかった他職種がだめだったから、となっている。さらに、自分の意思ではあるものの「なんとなく」決めたものが、1期生で8名（17.8%）、10期生で6名（14.6%）あり、この傾向は例年大きな変化がないものと推察された。

これに関連して、アンケートの終わりで再度「この大学・学科を選択した本当の理由」をたずねたところ、表2に示す結果となった。1期生と10期生で最も異なる点は、やはり先輩の有無にかかわることである。先輩のようになりたいから、先輩が良いといったからなど、10期生の情報源の拡大がみられるようである。特に、10期生の「オープンキャンパスの雰囲気良かった」にみられるように、入学の際の意思決定は学問性や専門性のみによって行われるのではなく、大学の持つ雰囲気が大きく影響することが推察される。作業療法学科のように、明らかな方向性をもつ学科であっても、受験と入学は別問題として考える必要があることを示唆する。

表2 大学・学科を選んだ本当の理由 (件)

質問内容	1期生 (n=45)	10期生 (n=41)
近いから(地元・県内)	14	10
作業療法士になりたいから	13	7
他の大学(学校)を落ちたから	12	
作業療法学科があったから	8	2
新設校だから(一期生だから)	6	
親や教師に勧められて	5	2
専門学校・短大よりいいと思った	4	2
どこでも良かったがたまたま	3	
最初からこの大学を狙っていた	2	3
リハビリテーション関係に興味があった	2	2
資格がいると思ったから	2	1
設備(環境)がよいから	1	3
オープンキャンパスの雰囲気が良かった		5
国家試験の合格率をみて		4
先輩に勧められて		2
自分のレベルに合っていると思ったから		2
好きな部活があったから		2
入試状況と合格率をみて		2
カリキュラム・専門科目などを考えて		2
就職状況をみて		1
その他	6	6
計	78件	58件

3) 学科の学習内容に対する意識差

入学時の専門への知識と態度を把握するため、「作業

療法学科ではどのような勉強をするところだと思うか」をたずねてみた。表3に示すように入学期別のベストファイブをみると、内容的にはほぼ同様の傾向を示したものの、対象数に対する比率による順位では明らかな違いがみられた。

調査を行った時期が入学後3ヶ月を経過しているため、この回答には入学後の学習内容(履修状況)の関連も考えられる。1999年以後2回のカリキュラム改訂を行い、1年次に学科専任教員の関わる科目が増加している(9科目13単位→14科目25単位)。このように、1期生より基礎教育が充実しているにもかかわらず、10期生では開講中の授業やリハビリテーションの総括的視点からの回答が多く、1期生にみられた「作業療法士になる」ことに対する意識差が生じている。このことは、1期生が将来的展望を持ちながら学習しているのに対し、10期生は目の前のことで精一杯という状況を示したもののといえ、作業療法士になることより、単位をとるための勉強が主たる目的となっている様子を推察させる。

また、表3以外の特徴的傾向として、1期生に国家試験に受かるための勉強(2件)や、人間性・精神力の向上など自分自身の成長に関する回答もあり(1期生6件、10期生1件)、1期生のもつ学習態度に比較して10期生は消極的傾向にあると考えられる。

このことは、今の学生が余裕のない大学生活を送っているとともに、10年間における大学生の意識変化を示唆しているとも考えられる。

表3 作業療法学科はどんなことを学ぶ所と思うか？

1期生のベストファイブ (n=45)	件数	n比
作業療法士として必要な専門知識と技術	26	57.8%
人や患者さんとの接し方・対応について	17	37.8%
人体の構造・仕組み・機能に関すること	12	26.7%
リハビリテーションの知識・方法に関すること	9	20.0%
幅広い知識や教養を学ぶ	6	13.3%
10期生のベストファイブ (n=41)	件数	n比
人体の構造・仕組み・機能に関すること	18	43.9%
リハビリテーションの知識・方法に関すること	15	36.6%
作業療法士として必要な専門知識と技術	12	29.3%
精神面(的)、心のケア、心理学など	11	26.8%
人や患者さんとの接し方・対応について	10	24.4%

4) 大学に対する期待度

前項において、1期生に比べて10期生では、目の前の勉強への関心が高いことを指摘した。目的意識の希薄さ

につながらないともいえないが、目的達成に現在の勉強がどう役立つかを意識することができれば、この問題はクリアできると考える。そこで、作業療法士になりたいと考えて入学した学生が、入学3~4ヶ月後に「自分が考えたことがここで実現できそう」と思っているか、その回答状況を表4に示した。

全体的には約7割ができそうだと回答し、1期生・10期生ともにほぼ同様の傾向を示した。これに対して、「できそうにない」と回答したものが、10期生で多いことが注目された。なお、「わからない」の回答肢はもともと設定していないにもかかわらず、1期生では11名が自分で書き加えて回答していたものである。10期生は準備された選択肢によって回答したものであり、自分の意見を適切に述べるということからいえば、1期生の方がその主張ができるものと考えられる。ここにも、時代の変化と学生の意識の違いを見ることができるようである。

表4のN群は、受験の動機に「作業療法士になりたいから」と回答した学生である。このN群の「できそうにない」理由では、「勉強がきつい、時間的余裕がない、授業についていけない、不安」がすべてであり、1期生・10期生共に同様の理由であった。入学時に作業療法士になりたいと思っていたものが、その数ヶ月後には意欲の減退を示すものがあることを示唆する結果ともいえる。ただ、表4の1期生3名はいずれも留年することなく卒業し、国家試験にも合格していることから考えると、いかに学習態度を形成させていくかが重要な教育視点といえる。一方、「できる」と回答したものの多くは、勉強はきついが身になると思う、授業が楽しい、先生が熱くていい、専門的なことが多いから、設備が充実しているなどであった。

これらのことから、同じ状況下にあっても、その状況をポジティブにとらえるものと、ネガティブにとらえるものによって、「できる・できない」が決定されると考えられ、学習態度の形成に向けた教育支援の重要性が示唆された。

表4 自分の考えていることがここでできそうか？

	人数(%)			
	はい	いいえ	わからない	無回答
1期生	29 (64.4)	5 (11.1)	11 (24.5)	0
N群*	22 (71.0)	3 (9.7)	6 (19.3)	0
10期生	29 (70.7)	11 (26.8)	0	1 (2.5)
N群*	23 (69.7)	9 (27.3)	0	1 (3.0)

*N群は「作業療法士になりたい」と回答したもの。
対象数は1期生45名 (N群31名)、10期生41名 (N群33名)

3. BAQLによるQOL得点比較

入学年度によって学生の生活観が異なるかどうか、BAQLを用いて検討した。回答者数は1期生46名 (男9名、女37名、平均年齢19.3±2.7歳)、10期生39名 (男20名、女19名、平均年齢18.5±0.5歳)である。比較検討にはt検定を用いた。1期生と10期生の年齢間に有意差は認めなかったが、性別では明らかに10期生の男性が多い傾向にあった ($p<0.01$)。

1) 期別にみたQOLの傾向

表5に示すように、QOL値において1期生のQOL値が高かったが、有意な得点差を認めていない。BAQLの下位項目では、周囲との関係 ($p<0.01$) と生き方に対する自信 ($p<0.05$) において1期生の得点が有意に高かった。1期生の下位項目では、周囲との関係に次いで活動の自立度、外出の度合い、主観的健康感などが高い反面、生活のゆとり感の低得点が注目された。このことから、精神的なゆとりはないものの、友達関係などによって健康的な生活を送っている様子うかがわれ、生き方に対する自信に影響したと推察される。これに対し10期生の場合は、活動の自立度とともに趣味や楽しみあるいは生活のゆとり感において1期生より高い得点を示しており、生活が個人を中心として行われていることを推察する結果といえ、10年間における学生気質の違いを示唆するものと考えた。

1期生と10期生で性別構成の違いが明らかとなったので、QOLにおける性別比較を試みた。表6にQOL値と各入学年次において有意差のあった下位項目を示す。QOL値に有意差を認めなかったが、下位項目において特徴的な性差があることが明らかとなった。全体では、女性の経済的満足が高い結果となったが、これは10期生の結果が影響したものと考えられる。下位項目においては、1期生の主観的健康感と心理的安定度において女性の高得点傾向にあるのに対し、10期生では女性の経済的満足度が高い傾向にあった。さらに、1期生では男性のQOL値が低いのに対し、10期生では女性の方が低得点となっている。これらの関係は、有意に差が生じる状況ではないが、1期生と10期生における特徴的傾向といえることができる。

1期生の女性は健康的・安定的に生活しており、それがQOLの高得点に影響していると考えられたのに対し、10期生の女性は経済的余裕を感じさせるものの、QOLを高める要因とはなっていない状況を示したといえる。こうした違いが10年間の社会的変化を示唆すると考えられ、QOLと社会的関連要因の分析が今後の課題となった。

表5 QOL得点比較

	区分	平均値	SD	T検定
QOL値	1期生	68.25	12.55	P<0.01
	10期生	66.64	13.68	
活動の自立度	1期生	82.00	13.13	
	10期生	83.15	15.04	
体調と不快感	1期生	72.37	20.76	
	10期生	73.90	22.76	
落ち着いた気分	1期生	67.59	19.80	
	10期生	63.97	20.96	
生活上のハリ	1期生	66.67	21.63	
	10期生	61.69	21.78	
趣味や楽しみ	1期生	60.50	25.00	
	10期生	68.28	22.21	
周囲との関係	1期生	83.50	14.66	
	10期生	70.44	18.77	
主観的健康度	1期生	78.11	18.67	
	10期生	74.82	20.06	
心理的安定度	1期生	64.57	21.27	
	10期生	63.46	23.43	
現在の幸福度	1期生	70.04	23.30	
	10期生	71.63	17.32	
生活の満足感	1期生	67.13	21.40	
	10期生	67.00	21.23	
外出の度合い	1期生	72.85	23.37	
	10期生	69.64	18.56	
経済的満足感	1期生	64.57	26.23	
	10期生	62.36	22.77	
生活ゆとり感	1期生	43.61	24.39	
	10期生	51.13	20.68	
生き方の自信	1期生	62.07	22.34	P<0.05
	10期生	51.38	24.75	
意思の反映度	1期生	59.96	22.96	
	10期生	66.85	14.69	

t 検定：記述部分以外はすべて有意差なし

表6 性別・期別QOL比較

		性別	N	平均値	SD	t 検定
全体	QOL値	男	29	66.14	13.36	p<0.01
		女	56	68.22	12.92	
	経済的満足感	男	29	53.14	26.03	
		女	56	68.95	22.17	
1期生	QOL値	男	9	61.25	11.92	p<0.01
		女	37	69.96	12.25	
	主観的健康度	男	9	62.56	13.15	
		女	37	81.89	17.95	
	心理的安定度	男	9	47.89	22.57	
		女	37	68.62	19.13	
10期生	QOL値	男	20	68.35	13.66	p<0.01
		女	19	64.84	13.84	
	経済的満足感	男	20	53.35	25.09	
		女	19	71.84	15.66	

t 検定：記述部分以外は有意差なし

2) 意識調査とQOLの関係について

大学に対する期待感で述べた「できそう群 (Y群)」と「そうでない群 (N群)」に分けて、QOL値の比較を行い、両者に有意な差は認めなかった (Y群n=55：平均69.0±13.1, N群n=30：平均64.7±12.7)。この傾向は1期生と10期生の間でも同様であったが、1期生に比べて10期生の得点差が目目される (表7)。

また、作業療法士になりたいと回答したものとそうでないものとのQOL値を比較したが、期待感と同様すべての関係において有意な差を認めることはできなかった。ただ、全体比較で作業療法士になりたいと思って入学したものより、そうでないもののQOL値が高いことが注目された。これは10期生の得点差と対象者数の影響もあると推察できるが、説明し得るだけの明らかな理由を見出すことはできず、今後の検討課題となった。ただ、動機より期待感においてQOL値が高い状況を見ることができ、動機がどうであれ入学後に期待感を持たせるような教育・指導が重要であることを示唆する結果ともいえる。さらに、QOLは個人の生活観でもあることから、日常の生活のあり方すなわち適正な生活習慣の形成が、期待感或いは学習意欲に関連するともいえ、将来望まれる自己成長への基盤ともなる⁵⁾。この傾向は、医学部学生において入学の動機が学習に関するものであるほど、入学後の満足度は高いとする報告があることから⁶⁾、学習意欲とともに自己成長を促進し、学習への期待感を高めるための教育が必要といえよう。

表7 意識調査とQOL

		区分	N	平均値	SD
期待感とQOL	全体	Y群	55	69.04	13.08
		N群	30	64.71	12.67
	1期生	Y群	29	68.95	13.1
		N群	17	67.07	11.83
10期生	Y群	26	69.15	13.3	
	N群	13	61.62	13.54	
動機とQOL	全体	なりたい	61	66.86	13.24
		他	24	69.29	12.54
	1期生	なりたい	30	69.57	12.77
		他	16	65.79	12.13
	10期生	なりたい	31	64.67	13.43
		他	8	74.28	12.61

*SD：標準偏差、いずれの関係においても有意差は認めない

まとめ

10年という年月が受験生の意識を変化させている状況について、今回の研究でその傾向が明らかになった。受

験の動機は作業療法士になりたいという気持ちはあったにせよ、実際入学する際には他の要因が大きく作用していることが明確となり、受験と入学は異なったものと考えられる学生の増加が示唆された。特に、入学の動機が「自分の求める教育が行われるかどうか」ではなく、国家試験の合格率やオープンキャンパスの雰囲気などにあることを考えると、学生が大学に求めるものは学問とは異なった部分にあることも示唆された。それだけに、入学する学生の多様性がより一層拡大することも予測され、大学教育のあり方にも関連してくる。大学全入時代とはまさしくこうした状況の拡大を意味するものとも考えられる。関連して、看護を学びたい思いの強さが入学後に減少している現状について報告し、動機を維持するための教育方法の工夫が必要であるとの指摘もある⁷⁾。さらに、中途退学者への初頭努力への支援が重要であるとする報告もあり⁸⁾、入学する学生の多様性（本研究でいうネガティブ傾向学生）の増大を示唆するものとする。

本論文において、高校時代の適切な情報が受験動機につながることを指摘したが、正確な情報とともに高校生に早い時期から興味を抱かせることが大切である⁹⁾。また、医学部学生の場合も同様で、入学動機と将来の医師としての自己像形成に、自分の医療経験、家族、マスメディアによる影響が指摘される¹⁰⁾。作業療法士としての具体的な自己イメージを持たせることのできる情報提供が望まれる。

QOLの視点からみれば、10年間の学生の質が変化している様子がうかがわれ、最大の変化は「自信のなさ」に代表される。入学の動機において徐々に積極的な意思が薄らいでいることが推察され、特に「1期生だから」という積極的姿勢が、果たして10期生の中にも芽生えただろうか。その自信のなさを1期生の状況から検討すると、周囲との関係づくりのまずさに関係していると考えられる。現代の学生は積極的に他人と交わることを苦手としているようであり、一般的に指摘される一人での生活を好む傾向を示していると考えられる。入学後の学生の満足度は、学習や実習を重ね自信がつくことで高まる可能性もあることから¹¹⁾、学習への積極的姿勢の形成と期待感を高めることで、より充実した大学生活ができるのではないかと考える。

今回の研究からみえてくる大学の姿は、周囲との関係づくりが苦手な学生で、学ぶことに自信がなく消極的傾向にある学生に対し、負担をかけずに繰り返し学習できる教育環境をもつ大学ではないかと考える。このことは、専門性の高い学部・学科にあっても、教養ある専門家を養成するわちエリート教育から、専門性のある教養人養成する

わちリベラルアーツ教育¹²⁾への転換を意味しており、現代社会が求める大学の役割がここにあると考えられる。

謝辞：本研究はQOLプロジェクト研究の一環として実施したものであり、本調査に快く応じてくれた1期生ならびに10期生の諸君に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1 金田一春彦他監修：新世紀ビジュアル大辞典。学習研究社、東京、2004。
- 2 辻幸恵：流行と日本人。第4版、白桃書房、東京、pp153-156、2005。
- 3 私立大学情報教育協会編：平成19年度私立大学教員の授業改善白書。社団法人私立大学情報教育協会、東京、p1、2008。
- 4 福本安甫、江草安彦、関谷真：基本的QOL評価尺度の開発。作業療法19：24-31、2000。
- 5 服部容子、吾妻知美：看護学科新入生の入学動機と生活習慣に関する調査（生活援助技術の授業内容の検討）。甲南女子大学研究紀要1：61-71、2008。
- 6 Gotouda, H., Fukumoto, M., Sasai, H., et al. : An Analysis of University Entrance Examination Publicity for Achieving Educational Qualitative Articulation: Part 1: Comparison of Evaluation Scores for Motivation to Enter University. Nihon Univ. J. Oral. Sci. 32:12-16, 2006。
- 7 堀井直子、三浦清世美、久米香、他：本学看護学生の入学時における学科志望動機（志望動機を反映させた教育を探る）。中部大学生命健康科学研究紀要4：11-20、2008。
- 8 谷川恵美子、村由美子、萩中正二：わが校における中途退学者の早期発見と学生指導について。日本歯科技工学会雑誌28：83-85、2007。
- 9 下山和弘、吉増秀實、木下淳博、他：口腔保健学科への出願と歯科衛生士という職種に対する意識との関連。口腔病学会雑誌73：27-32、2007。
- 10 Miyata, Y., Higashi, H., Yamamoto, W. : A Qualitative Study of First-year Medical Students: Why do students want to become physicians? What kind of physicians do they want to become?. General Medicine 7 : 39-44, 2006。
- 11 杉本明子、成瀬悦子、生田美也子：看護学生の看護師選択及び看護師志望に関する意識の変動（2年課程

の入学から卒業まで). 看護教育37 : 372-374,
2007.

- 12 実松克義 (北尾謙治他著) : 大学の魅力 : 広げる知
の世界. ひつじ書房, 東京, p3, 2007.